

演題番号：4

演題名：豚サルモネラ症のと畜検査データ解析

発表者名：○北野崇¹⁾ 稲嶺美奈子¹⁾ 小原海和¹⁾ 大城守²⁾

発表者所属：1) 中央食肉衛生検査所 2) 中央家畜保健衛生所

1. はじめに

当検査所では2008年度以降、継続して豚サルモネラ症が多発傾向にある。しかしながら、これまで本症に関わると畜検査データの分析は実施されておらず、他の疾病や臓器所見との関連性は明確になっていない。そこで今回、サルモネラ症に関する畜検査データ及び保留獣畜記録簿を詳細に解析したところ、生産者へ還元しうる有用な情報、またと畜検査現場において本症を鑑別するための情報が得られたのでその概要を報告する。

2. 材料及び方法

(1) 材料：

2008年4月から2010年12月までに搬入された豚（委託農場、繁殖豚は除く）の食肉検査データシステムおよびサルモネラ症保留記録簿

(2) 方法：

搬入農場をサルモネラ摘発農場群（以下S農場群）39戸410,383頭とサルモネラ未発生農場群87戸135,278頭の二群に分け、各農場におけると畜数、臓器病変率、豚丹毒陽性率、トキソプラズマ陽性率、敗血症（抗酸菌症）陽性率を算出し、両群の間でT検定による統計学的有意差を調査した。またサルモネラ症保留記録簿から肝臓及び採材リンパ節の炎症程度を数値化し保留検体の検査結果との関連性を調べた。

4. 結果

S農場群で未発生農場群に比べ有意に高かったのは1農場あたりのと畜数、大腸炎罹患率、出血性大腸炎罹患率であった。逆に、寄生虫性間質性肝炎罹患率は有意に低かった。S農場群における大腸炎罹患群、出血性大腸炎罹患群ではそうでない群に比べ1頭あたりの平均枝肉重量が有意に低かった。また、肝臓の腫脹、出血、壊死の程度および胃肝門リンパ節の腫脹、出血の程度は陽性になった検体で有意に高かった。

5. 考察およびまとめ

S農場群ではサルモネラ症だけでなく大腸炎、出血性大腸炎罹患率も高く、またS農場群内の大腸炎・出血性大腸炎罹患群はそうでない群に比べ1頭あたりの平均枝肉重量が低下することから、サルモネラ症による少数の全頭廃棄だけでなく、腸炎による全体的な損失を受けていることが推察された。S農場群のような大規模農場では飼養管理の失宜、密飼いストレス等による大腸炎、出血性大腸炎の多発傾向が見られる一方で、オールイン・オールアウト方式が採用されることが多いため寄生虫性間質性肝炎罹患率は低下したと推察される。また本症保留にあたっては、S農場群のと畜検査結果の傾向を念頭に置いた上で、肝臓だけでなく胃肝門リンパ節まで含めて保留の判断材料にする必要があると考える。